Book Review

地方自治体の「実態」

関西学院大学法学部・大学院法学研究科 教授　金﨑 健太郎

あたりまえの話ではあるが、市町村や都道府県で働く職員や議会の議員にとって、地方自治体は日常的な仕事の場である。世の中のために働くやりがいのあるこの職場が他の職場と違うのは、それが国家の一部を形成する公共的な組織であるという点だ。それゆえに地方自治体は従来から多くの研究者によって研究の対象として捉えられている。行政学という学問領域である。地方自治体そのもの、そしてそこで働く職員や議員の意識や行動は、行政学の研究者にとっては重要な分析と考察の対象なのである。普段の仕事から少し離れて、自分の職場である地方自治体や地方議会がどのように研究されているのかを学ぶことで、日々の仕事に対する姿勢や判断の幅も広がるのではないだろうか。

『日本の地方政府―1700自治体の実態と課題』〈中公新書〉（曽我謙悟／著、中央公論新社、946円）は、現在の都道府県や市町村の姿を幅広い角度から分析し考察した本である。地方における政治、行政組織、職員人事、住民との関係、自治体どうしの関係や国との関係など、関係する制度やそれらの歴史、運営の実態、そして将来に向けた課題まで含めて地方自治体の実態を具体的な数字を織り込みながら緻密に描き出している。普段の政策立案や実施にあたって頻繁に行う他団体との情報交換や意見交換は地方自治体の職員であれば普通のことと感じているが、ここでは「相互参照」と分析され、地方自治体における日常的な政策実施で強い愛着が持たれているとされる。自治体職員の日常的な行為まで客観的に分析しているのはとても面白い。

『日本の地方政府―1700自治体の実態と課題』　曽我謙悟／著　中央公論新社

次に地方議会に焦点をあてた本として『日本の地方議会―都市のジレンマ、消滅危機の町村』〈中公新書〉（辻陽／著、中央公論新社、946円）をご紹介する。この本は制度と実態の両面から地方議会と地方議員の現状を詳細に分析し、これから必要とされる議会改革とは何なのかを考察している。とかく住民から見えにくいと指摘される地方議会であるが、議員の具体的な仕事内容やなり手不足と言われる選挙、過去にも社会問題となった議員報酬や政務活動費の実態など、地方議会と議員について制度と実態の両面から分析を加えている。筆者は地方議員は名誉職と専門職の中間にあるような中途半端な位置付けであるとし、議会改革についても、議会内部で行われている改革と国の研究会などで議論されている改革とはその方向性が噛み合っていないと指摘する。今後の地方議会のあり方を考える上で参考になる本である。

『日本の地方議会―都市のジレンマ、消滅危機の町村』
辻陽／著　中央公論新社